

近代英語協会第 30 回大会

— シンポジウム・研究発表 —

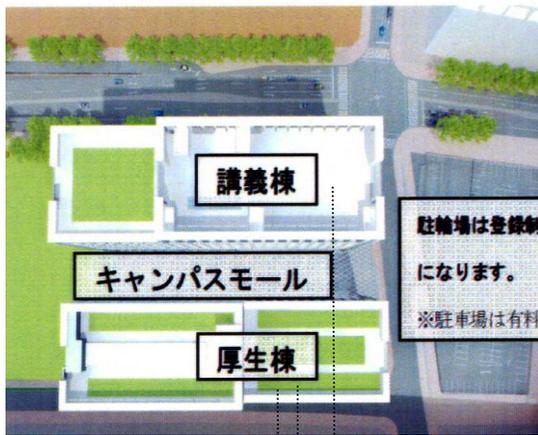
日時：2013年7月6日(土)

会場：愛知大学名古屋キャンパス 講義棟 9階 L904

453-8777 名古屋市中村区平池町4丁目60番6

TEL 052-564-6111 (代表)

<A>



講義棟		厚生棟	
11F	教室		学生サークル室
10F	教室		学生サークル室
9F	教室		学生サークル室
8F	教室		学生サークル室
7F	教室		スタジオ・武道場・多目的競技室・和室
6F	教室・教職課程センター室	アリーナ(体育館)・フィットネスルーム	
5F	教室	連絡ブリッジ	事務室
4F	研究室		メディアゾーン・教室・事務室
3F	研究室		図書館・国際ビジネスセンター 国際中国学研究センター(ICS)・研究所・学生
2F	教室	連絡デッキ	図書館
1F	フードコート・店舗	キャンパスモール	キャンパスレストラン・図書館
B1	地域冷暖房プラント・駐車場(身体障害者用)		

名古屋キャンパスフロアガイド

大会会場
講義棟 9階 L904

理事会 編集委員会会場
厚生棟 3階 会議室 W31

懇親会会場
厚生棟 1階 キャンパスレストラン「アペティ」

会場への地図は、裏面に記載してあります。

近代英語協会事務局

〒732-0063 広島市東区牛田東4-13-1

広島女学院大学大学院言語文化研究科 英米言語文化専攻米倉研究室内

協会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/mea/index.html>

(電話: 082-228-0386 (大代表))

会費振込口座 00810-9-5821) 30周年記念事業寄付金振込口座 00830-8-190834

「HTOEDを用いた英語史研究」

- 司会：小倉美知子（慶應義塾大学教授）
講師：小倉美知子（慶應義塾大学教授）
講師：米倉 綽（広島女学院大学教授）
講師：児馬 修（立正大学教授）

シンポジウム趣意書

慶應義塾大学教授 小倉美知子

HTOED (The Historical Thesaurus of Oxford English Dictionary) が2009年に刊行されたことで、英語の通時的な研究における精密度が上がり、電子コーパス化されることにより古英語・中英語を読むのが苦手な者でもとにかくアクセスして、特定の意味分野における類義語の「生涯」とその長さ短さを確認できるようになった。しかし編者の側からすると、意図したような使われ方がされていないと感じているようで、特に *website* のみに頼り、書籍の方は参考にしないうみか正しい使い方を知らない者が増えていると嘆いている。本シンポジウムでは、そのような誤用を正し、歴史的文献を収録した辞書やコーパスの有効利用を促すことを目標に、古英語・中英語・近代英語以降の3時代に分けて、英語の通時的な研究法を、特に意味と語彙の分野において再考する。

「語彙のキリスト教化とキリスト教の語彙化」

慶應義塾大学教授 小倉美知子

キリスト教が563年にアイルランド経由でスコットランドから、597年にローマから直行でカンタベリーに伝来した、その30余年の差によって、ゲルマン的語彙のキリスト教化がなされた後、大規模なラテン借入語の導入により、キリスト教の概念が語彙化（lexicalise）されることになった。本発表では、その足跡を *HTOED* の利用により明らかに出来るか、その方法を探ると共に、キリスト教導入以前には英語に無縁であったと思しき概念の語彙化の過程をたどる。

「中英語における grace の意味」

広島女学院大学教授 米倉 綽

現代英語の *grace* が古フランス語から初期中英語期に流入されたときの意味は「(神の) 恵み、恩寵」であった。その後、後期中英語期を中心に「優雅、気品、上品さ」から「好意、親切、魅力、美点」などの意味の変化または拡大が見られる。つまり、外見上の気品から内面的なものを表すことになる。本発表では、*grace* を例に、このような意味の発展あるいは類義語が *HTOED* を利用することで、より明確にできるかを考察する。

「派生接辞 -able の史的発達における特異性」

立正大学教授 児馬 修

現代英語における形容詞派生接辞の一つである *-able* (起源的には OF 借入接辞) が持つさまざまな性質についてはすでに知られていることも少なくないが、それらが歴史的にどのように獲得されたかについては、必ずしも十分な研究がなされてきたとはいえない。本発表では *-able* の史的発達における特異性をいくつか示しながら、どこに興味深い問題が潜んでいるのかを明らかにしたい。また、その特異性の一つに「意味」が関与するが、*HTOED* をどのように活用できるかについても探りたい。

司会 南山大学短期大学部准教授 石崎 保明

1. 「英語の語彙の意味変化 — ‘involved’ と ‘concerned’ の場合についての一考察」

青山学院大学大学院文学研究科博士後期課程 渡邊 文文

英語の語彙において、従来用いられてきた意味から派生・転用されて新たな意味として用いられる事例がある。例えば、‘involved’ や ‘concerned’ といった語が該当事例である。本動詞として、‘involve’ 及び ‘concern’ が存在し、‘-ed’ 形を伴って、過去分詞化されたものに見える。しかし、意味の面で、‘involved’ の場合には、「含まれている」以外に「複雑な・込み入った」という新たな意味が生じている。そこで、本発表では、まずは、‘involved’ の場合について考察し、OED を素材として、文献上、いつの時代から英語の中で「複雑な・込み入った」という意味が生じてきたのか、また、その意味で用いられる際の語法上の特質とはどのようなものか、について論じたい。

2. 「後期近代英語における法副詞の機能的変化について」

日本学術振興会特別研究員 PD 鈴木 大介

法副詞は英語史において主観性や認識性の発達との関連から分析がなされてきた (Hanson 1987, Swan 1988, 前田 2008)。しかし、現代英語においては、多様な法副詞が文中の様々な位置に生起し、多機能性を備えている。本発表では、主に Penn-Helsinki Parsed Corpora of Historical English (PPCEME, PPCMBE) や Corpus of Late Modern English Texts (Extended Version) (CLMETEV) を用いて、法副詞について機能的な観点からの網羅的な分析を行う。その中で、とりわけ *no doubt*, *doubtless*, *perhaps*, *maybe* といった、現代英語における特徴的な表現が、後期近代英語期に法副詞としての性質を帯び、その後、現代にかけて様々に発達した経緯を記述し、説明することを目指す。

References:

- Hanson, Kristin (1987) “On subjectivity and the history of epistemic expressions in English”. *Papers from the 23rd Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* ed. by Barbara Need, Eric Schiller and Anna Bosch, 133–147. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 前田満 (2008) 「法副詞の発達と主観性」『英語青年』153 (10): 627–630.
- Swan, Toril (1988) *Sentence Adverbials in English: A Synchronic and Diachronic Investigation*. Oslo: Novus.

司会 目白大学教授 山田 宣夫

1. 「近代英語期における従属接続詞 *because* の談話標識的用法」

東京学芸大学非常勤講師 東 泉 裕 子

本発表では、現代英語において規範的には従属接続詞とされる *because* の談話標識的な用法について考察する。現代の話し言葉において、*because* は、前の文脈に *why* 疑問文などが存在しなくても、発話の冒頭に現われることがあり、そのような場合は従属接続詞というよりもむしろ談話標識として用いられているという指摘がある（小野寺 2011 など）。ARCHER 3.1 および劇の台本や小説の会話部分から用例を採取し、このような談話標識的な用法はいつごろから現われるのか、発話の冒頭の *because* はどのような文脈で用いられていたのかを調査したい。

参考文献:

小野寺典子 (2011) 「第4章 談話標識 (ディスコースマーカ) の歴史的発達」『歴史語用論入門』大修館書店

2. 「複合名詞の第2要素における母音の弱化について」

聖徳大学教授 藤原 保 明

複合名詞の第2要素の強勢は第1要素の強勢より弱く、母音弱化を受けやすい。そのために、たとえば *man* を第2要素とする複合名詞の場合、*gasman*, *merman*, *stableman* のように単数形 (-*man* [mæn]) と複数形 (-*men* [men]) が完全音価を維持し、[æ] : [e] という対立が存在する例 (以下、原型) の他に、*aircraftman*, *clergyman*, *postman* のように単数形 (-*man* [mən]) も複数形 (-*men* [mən]) も弱化して [ə] : [ə] となり、対立が生じない例 (以下、弱化型) も生じる。さらに、非標準的な異音が生じる3種類の間中型 (すなわち、[æ~ə] : [e~ə](=A型), [ə]~[æ] : [ə]~[el](=B型), [ə] : [ə]~[el](=C型)) が存在する。本発表ではこのような共時的異形は通時的音変化の反映とみなし、原型>A型>B型>C型>弱化型という4段階の過程を想定し、変化の要因等の詳細を明らかにしたい。

司会 関西外国語大学教授 菊池繁夫

1. 「wh 句を伴う分詞構文の衰退について」

豊田工業高等専門学校講師 中川 聡

wh 句を伴う分詞構文は現代英語ではほとんど観察されないが、初期近代英語では現代英語よりも頻繁に観察されていたことが先行研究で述べられている。本発表では史的コーパスを用いてこの事例を調査し、この事例が衰退し始めた時期を明らかにする。そして、この事例が現代英語にかけて衰退している要因として近代英語期に発達した動詞的動名詞と分詞構文の間に類推があったということを主張する。さらに Chomsky (2007,2008) で提案されている C-T 構造形に基づく主格付与の枠組みでこの事例の衰退について理論的観点からの説明も与える。具体的には動詞的動名詞との類推により分詞構文は C-T 構造形を持つものとして分析されなくなってきていると主張する。

References:

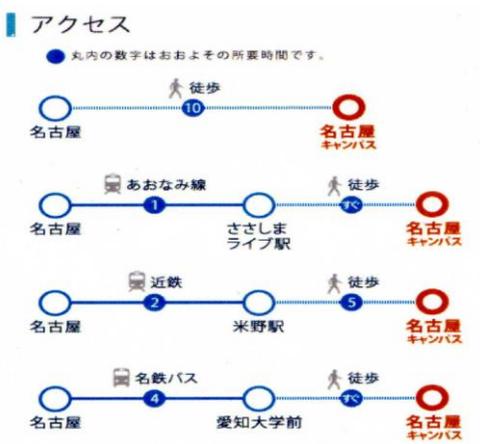
- Chomsky, Noam (2007) Approaching UG from below. In: Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner (eds.) *Interface + recursion = language?: Chomsky's minimalism and the view from syntax-semantics*, 1-29. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (2008) On phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133-166. Cambridge, Mass: MIT Press.

2. 「英語英文学研究と「選択」としての文体」

広島大学准教授 今林 修

かつて G.L. Brook (1970) は、作家の言語を研究することによって、作家が伝えようとする意味内容の理解を深め、その文学的才芸を十分に評価することができ、同時に英語史研究にもその材料を提供できると主張した。時に、研究の対象としての文体の定義に行き詰った文体論学者がある程度の体系化が済んでいた隣接領域である文学研究と言語研究との関連において自らの学問を規定しようと試みた (斎藤兆史、2000) 時期と一致する。

本発表では、シェイクスピア、オースティン、ディケンズのテキストを題材に、「選択」としての文体 (style as a choice) に着目し、作家の使用する言語を吟味するならば、文学的な読みと評価がどのように変わるのか、また、英語史研究にどのような言語材料を提供することができるのかを考え、英語英文学研究のあり方と意義を問いたい。時間が許せば、本研究の英語教育への応用についても触れたい。



会場地図<A>, , <C>, <アクセス>は、愛知大学公式ホームページから転載させていただきました。ご好意に対し厚く御礼を申し上げます。